

# 真山青果の考察

——『南小泉村』の方言使用を視点として——

伊 狩 弘

1

青果真山彬は明治十一年九月一日、仙台市裏五番町三番地に真山寛の長男に生まれた。裏五番町は現在の仙台駅前、中央一丁目あたりである。青果の生まれた頃、東北線はまだ開業しておらず、駅舎もなかった。家は代々伊達藩の大番組をつとめたというから旗本クラスの高級武士と言えるだろう。維新後に父は外記丁小学校や東二番丁小学校の校長で教育界に重きをなした。外記丁小学校は現在の県庁のあたりにあった。東二番丁小学校は青果の通った学校で、現存している。千葉亀雄や相馬黒光もこの小学校に在学していた。一般的に青果にはこの父の激しく狷介な性格が伝わったと考えられている。『父母の家』（『新潮』明治42・1）に父親の姿の一端が描かれているが青果の性格から推して強ち誇張であるとは言えない。

基もとの父、尾山敏おしとは県下に勢力ある教育家であつた。教育家と云つても、高が小学校の一校長に過ぎないのだが、その自ら持もつする事の厳おとかなると、精進の心の猛たけなるとで、その名望は寧ろ中学校より県の視学より上にあつた。尾山先生と云へば、市内の児童は勿論、その親々たる土地の有力者間にも畏敬されて居たものだ。一旦斯たんなうと思込んだ事は、何処が何処まで仕遂しとげずに置かぬと云ふ、烈はげしい、而して鋭とき性格を持つて居た。一時衰運に向うた二番町の小学校を盛興もりおこして、兎とに角奥羽六県の模範校にまでしたのは、この貴たかき性格の賜物であつた。父は何時いつも人に向つて、「人間の事業は庭の雑草ざくさを取るんだ。隅一尺づゝ取つて行く根気がなければ駄目だ。」と始終しじう然さう云つて居

た。

青果は東二番丁小学校を卒業し、仙台のキリスト教学校の草分け的な東華学校に入った。特記すべきは、青果は東華学校でキリスト教に触れ、次の青果の言を信じるならば独自のクリスチャンになったことである。

「愛読書の憶ひ出（方丈記——バイブル）」（『新潮』明治43・6）に次のようにある。

子供の時から自分の愛読した本の名を強ひて挙げて見ると、「方丈記」、「枕草子」、「バイブル」、ツルゲーネフの「獵夫日記」、極く最近では西鶴の「五人女」、「二代男」などである。（中略）

私どもの入つて居た仙台の中学校は、以前耶穌教の学校で、その頃の校長は元大阪市長の市原盛宏と云ふ人であつたし、今は青山学院の部長をして居る和田正義と云ふ人が幹事をして居つたが、それは名義だけで、その実権はデホレストと云ふ外国人が持つて居たらしかつた。

私が中学校を出て放浪して居た時代に、陰になり日向になつて私を監督してくれた人は、その外国人デホレスト先生であつた。（中略）その人が中ごろ米國へ歸る時——私の十六ぐらゐの時であつた——自分の客間にあつたテーブル・バイブルを私に与へて、是非それを読めと云つて勧めた。（中略）その後、私は、放浪に放浪を重ねて、石の巻の湯屋の二階へ落魄して居る時に、或る晩気が向いて、先生から贈られたその聖書を開いた。そして、馬太伝の一篇を全部読み通した。その時私の心は何とも言へぬ靈光に打たれた。（中略）

それから今日まで一日もクリストに離れたことはない。唯、困ることは宣教師や、その他の人が解して居るクリストより、突飛にも甚だ異つた見解を持つて居る。

新島襄の東華学校は清水小路、現在の五橋辺りにあつた。その後東華学校が廃校になつたため宮城県尋常中学校に入學したが怠学癖がついて落第中退し、上京して杉浦重剛の日本中学の五年に編入したのが明治二十九年、満十八歳の時であつた。その後仙台に戻り、第二高等学校医学部に入り三年ほどして再び退學し、郡立病院の薬局生、南小泉の代診、私立中学の国語教師などを転々とした。この体験が後の『南小泉村』になつたわけである。こうした放浪的生活の間に徳富蘆花に傾倒して上京、佐藤紅緑や佐藤義亮ら東北出身の諸家の世話になり、さらに腐れ縁的な子弟關係となつた小

栗風葉の弟子になって、明治三十年代末の自然主義文学勃興期の文壇に頭角を現すまでになった。「奈何にして文壇の人となりし乎」(『新潮』明治41・12)には以下のように書かれる。

僕も、他の人々と同じやうに、別に、文壇の人とならうと云ふ見当をつけて、文壇の人となつた訳ではない。唯、ずるゝになつて来たのである。(中略) 実際、小説を書かうと決心したのは、医者になれないと定つた二十五歳の時である。腕白で怠け者なので、無論郷党には信用がなし、学校は退学せねばならぬやうになる、父の死後、家は貧家になり仙台を食ひ詰めて了つて、何うにも仕方なく当惑して居る所へ、其頃東京に居た草野柴二君が、暑中休暇で、丁度帰つて来て、僕に小説家になれと云ふ。(中略) 出京することはしても、別に学資の来る所もなければ、少しの収入もないので、其当時は、雑司ヶ谷の友人の家へ食客同然の、悲惨な放浪をして、次ぎに佐藤紅緑氏の家へ寄食した。

当時、新潮社の佐藤橘香氏が紅緑氏と懇意であつたので、何か紅緑氏が新潮に書く約束をした。所が其れが期日になつて出来ぬので催促に來られた。で其間に合せに、僕の留守の時、僕の書いた「かたばみ」と云ふ小説を、僕の机の抽斗から出して、其自分には未だ名も何もない時なので姓は書かず、只、青果と署名して雑誌に出した。

その後、三十歳になるかならない程度の新人でありながら流行兒となつて、明治四十年には『南小泉村』の短編を含めて十一作を著し、翌年には三十四作を書き、『青果集』を新潮社から出すまでになった。ところが多作がたつたかして、原稿の二重売りという失策を二度も起こし、文壇の表舞台から退かざるを得ないことになった。まことに青果らしい文壇登場と退場の顛末と言えよう。一寸考ええると原稿二重売りは青果の出鱈目な性格とか金欲しさのために行った無節操といった見方をされそうだが、本当のところはその逆に、真面目過ぎるというか偏頗偏執と言えるほどの正直さが仇になつて適当なところで妥協するタイミングを逸したといったところだつたのではないだろうか。それにしても常人以上に青果は潔癖正直な性格だつたようで、世間並みに言えは偏執的な性格だつたようだ。「四十二年初頭の告白」(『読売新聞』明治42年元旦)に於て次のように語っている。

斯う云ふ事を書いたら、矯激を好むと見られるかも知れない。然し、自分には熟考に熟考を重ねた事である。

明治四十二年、一月一日。之を書いて、固くこれを世間に誓つて置く。

僕は随分世間に非難の多い男である。新聞に雑誌に、始終色々の御厄介になつて居る。然し、正直に云ふと嘘が多かつた。僕が嘗て問題として論じられた事は多く謬つて居た。何を間違つてこんな事になつたらうと、思はれる事の方が多かつた。

二重売り、代作、放語、罵倒、絶交。なるほど爲ました。言訳をしたり、ゴマかしたりすれば、何れも為るだけの理由もあり、又他の同情を求むるだけの理由は皆あるのだが、結果は同じ事である。男らしく自己の責を負うて白状します。僕は過去の一年間に、それだけの悪徳を働いたに相違ない。

然し、僕は今日まで、嘗て一度も自らを卑し浅間しと顧みるほどの卑怯を働いた事はない。夜、寢床へ入つて考へて見て、自ら恥ぢた事は一度も無い。(中略)

で、無理な相談かも知れないが、僕に一つの相談がある。僕は決して多大の野心も抱負も希望も持たぬ。自分の書いたもので衣食し得ればそれで充分なのだ。天下文運の趨勢が何うあらうと、主張主義が何うあらうと、そんな事には門外漢である。僕は差物大工が火鉢を作つて食ふ気で、小説を書くのに過ぎないのだ。

だから、僕は職人と呼ばれても結構満足する。決して天下の師を以ては居らぬ。戯作結構、売文者結構、職人、戯作者、売文者に、嚴重なるそして苛酷なる人格を求むる人ありとせば、それは求むる方が無理である。

右の弁解を見ても青果の片意地な性格が表れている。明治一二年生まれで青果と同世代の正宗白鳥は近代文学の精緻な観察者であるが、当時既に青果に冷静な評価を下していた。<sup>1</sup>

その実力と現在の地位——地位と云ふと原稿料のことだらうか。其人に対する世の評価と実力といふやうな事は自分には一寸見当がつかない。さつぱり判らない。

その作品の長所短所——人に夫々特色がある事故、長所とか短所とか一口に云ふ事は出来ない。とにかく現代の作家中一番天分に富んだ人には違ひ無い。未だ忘れられぬといふ程の大作は書かれて無いが、少し落付いてしつかり身を入れて書いたら、現代作家中最もすぐれた作品を得られる人と思ふ。部分部分の描写には実に企て及び難き



ものがある。『南小泉村』が一番よかつたと思ふ。一体に人間を書いたものよりも、情緒とか心持とかを書いたものによいがある。『海辺より』などがいい、其自然の描写もいいが、此人の持つた心持——夫がいい。作品の調子は粗い方だけれど、随分細かい所にも気をつけてゐる。強いて難を云へばやゝ力負けのした形、読んでは了つてから力の抜けて了ふやうな処だ。

右のように白鳥は『海辺より』に一括された諸短編、随想といつてよいものを高く評価している。これは明治四十三年春に母親とともに国府津海岸に隠棲し執筆したもので、例えば「浜へ来て」（『新小説』明治43・5）という小品には、「浜へ来て日に日に悲し珈琲カヒのあぶら浮びて香のうすれ行くを。」という短歌があり、国府津へ移住してからの生活感覚の変化に言及して次のように述べる。

私はこの地に来て、心にも身体にも様々の試験を受けた。先づ身体の一例を云つても、生来嘗て覚えぬ歯を疾んだ。腸をそこねた。食べるものゝ味が総て変化した。従つて、東京に居た頃は見向きもしなかつたものに意外の嗜好を発見して、それを喜び食ふやうになつた。セイロン茶よりはチヨコレイトを好むやうになつた。

私はこの不快な経験からして、好く斯う思ふやうになつた。われ等の糧かてにも等しい思想にも土がある。早い話が、私はツルゲネフからチエホフに行く時、その移り変りの間に大なる悲味かなしみと未練かたじけなに苦しんだ。頭はそれを求めて居ても、身体が悲しんで応じない。ゾラを読んでモウバツサンを読んだ時でも同じ悲味かなしみを嘗なめた。

「思想にも土がある」といふやうな青果独特の言い回しを白鳥は味わい深く思つたのであろう。青果論で白鳥は更に続けて言う。

生活に濫する所以——交際してゐないから、よく判らぬ。矢張り落着いてゐられぬ性分で、酒でも呑んで騒がなければ堪へられんのだ。紅葉から風葉、風葉から青果、青果君も矢張り硯友社系のやうに世間では見てるかも知れんが、青果君は硯友社の人達とはすつかり肌合ひが違ふと思ふ。同じ酒を呑んで騒ぐにしても、風葉氏は面白がつてやる、青果君は苦しいのだ、その態度は全然違ふ。荷風氏や青果君は、年齢が同じ位の故為か、単に其作品を読んでも、どこか胸に触れる処がある。何れも苦しい人々である。

白鳥の見方は肯綮に中るもので、硯友社の遊戯的文学と青果文学は異質なものであることを看破している。青果は現実の苦しみを真率に偽りなく描きたいので、それを美化したり誤魔化したりは出来ない。『南小泉村』の表現にもそれが見て取れる。方言の多様もその一例であろう。

明治後期、青果と白鳥が文壇に登場した頃のことを白鳥は戦後に回顧した。それは白鳥が有名な「自然主義盛衰史」の第八回の原稿を書いていた昭和二十三年三月二十五日、青果が沼津市で七十歳にして亡くなった時のことである。二十七日の新聞で死を知った白鳥は次のように回想した。<sup>②</sup>

こゝまで書いた時に、私は真山青果逝去の記事を新聞で読んだ。(昭和二十三年三月二十七日)彼と私とは相並んで文壇に出たのであつた。二人の作家が対立して世間の噂にのぼり、優劣是非の批判を下されることは、常例のやうになつてゐて、自然主義のはじめて興つた頃には、独歩と藤村とが並んで唱へられ、独歩死後には、花袋藤村と云はれた。それに繼いで、青果と私とが競争者のやうに噂された。

右のように述べ、白鳥は青果が風葉の代作をしていた噂があつたが当時はそういった類のことは普通に行われていたこと<sup>③</sup>、後に現行の二重売りをしたために文壇から締め出されたが新派の脚本で糊口し、ある年に『玄朴と長英』を『中央公論』に載せて青果復活かと思われた。しかし青果は文壇に復帰はせず脚本家として立ち、その傍ら西鶴研究に心血を注いだ。白鳥は次のように締めくくる。

青果のやうな生き方も、一つの文学者の生き方である。彼は自分の創作には飽き足りないで、西鶴研究によつて心を慰めてゐたのであらう。これだけは一生の意義ある仕事であると心に安んじてゐたのであらうか。彼の出世作とも云ふべき『南小泉村』は、『土』以上に残酷に農村と農民を描写したもののだが、彼の戯曲の多くは、手きびしく人間を叩きつけてゐる。態度が荒つぽい。あゝいふ芝居を觀て見物は喜ぶのであらうか。

自然主義文壇に關係の深かった水守亀之助も後に原稿二重売り事件に言及して次のように述べている。<sup>④</sup>

明治の末期に文字通り一代の風雲児のごとき颯爽たる雄姿を文壇に現はした真山青果は、いはゆる原稿二重売事件が禍ひして永く蟄伏しなければならなかつた。新派の喜多村録郎の好意によつて松竹の座付作者のやうなものに

なり、亭々生などの匿名で脚本を書きつゞけ生計を支へてゐたが、まるで日蔭者のやうなみぢめな気持ちだつたらう。

二重売事件は決して悪意でやつたことでなく、むしろ過失だつたのだ。どちらが先だつたか忘れたが、ある一つの作品を急に急がしいところから窮余の一策として「中央公論」と「新小説」とに売つた。青果は鉛筆を五六本削つておいてノートに書き、それを書生に原稿用紙に写しとらせる習慣だつた。だから原稿を一社に渡してしまつてもノートの草稿は手許にある。それで、金の必要からもう一つ同じ原稿を清書させ、すぐ追つかけて新作を書いてとりかへるつもりで売つたわけだが、たうとう間にはあはず二つとも同じ月の号に出してしまつた。精しいことは忘れたが、どちらか一方の発表延期方を交渉したにちがひない。それが効かなかつたわけで成り行きに任せきりにしてゐたわけであるまい。万事がぐれはまになつたのが運の尽きだつた。

今から考へて見ると何とか世間への男らしい釈明や、雑誌社への陳謝などによつて救済法は講じられたのではなかつたかと思ふが、さういかないところに彼に対する文壇人らの反感といつたものが作用したのではないかと想像されるのだ。酒の上での暴言、傍若無人な傲岸さ、放縦な生活の為の濫作などが影響しないわけではない。

蛇足的だが、青果は性格が禍しかして、国木田独歩臨終に際して花袋らの輦蹙をかつたというか、様々の悶着を起こしたこともよく知られる。青果が独歩の病床に侍した経過は『病牀録』序文（新潮社、明治四十一年七月）に叙してある。

唯この書の成立を云はざる可からず。

余の独歩氏に田山花袋氏の紹介にて始めて面会せるは五月二日なり。其時氏は病院生活の甚だ索漠にして無聊に耐へがたきをが慨く。余気の毒に思ひ、幸ひ余は独身にして係累なし、何所に居るも同じ事、当分こちらに滞在してお話相手にならんと云ふ。独歩氏も喜び花袋氏も喜ぶ。その夜花袋氏私かに余に曰く、君の厚誼を謝す、余等友人の為に独歩の臨終を見とゞけ、それを世間に発表せよと。余出来得る限りを尽さんと誓ふ。

五月二日帰京、三日又風葉氏と南湖院を見舞ふ、一泊して四日帰京。家事の始末して同八日又茅ヶ崎に行き、六

月二十七日遺骸送京の日まで滞在す。その間一晚泊りながら東京に帰りし事二回。

当初余の考は、慰藉の傍、或る仕事をなさん計画なりき。されど独歩氏は余を枕側より離すを好まず、余も亦離るゝに忍びず毎日朝は八九時より午後五六時まで病室に詰切りてくだらぬ無駄話に氏を慰めたり。(中略) 仕事など出来るものでなし。黄昏困憊して寓に帰れば、一壺の酒に酔うて直に眠る。読売新聞に掲げたる通信文(本書の附録)でさへ余には甚しき重荷なり。

右のような事情で青果は独歩の臨終までを見届け、レポートした。その辺りから起つたもめ事は文壇内部の私怨的な事柄ではあるが少しまとめておく。青果は独歩が茅ヶ崎の南湖院で臨終の床に就いた頃、『読売新聞』(明治41・5・9(7・5))に「国木田独歩氏の病状を報ずる書」を十回連載した。初めの部分を次に掲げる。

風葉先生足下

昨日午後五時四十分茅ヶ崎着、直ちに南湖院を訪ふ。土産物は御委託のトマト、新潮社の牛肉、亜米利加蜜柑、梨子。そして大船の押し鮫を一箱(中略)

僕の顔を見て独歩氏は果して大喜び、今朝から僕を言暮らしたと云ふ。(中略) そして「待つて居た、待つて居た。」と繰返しく云ふ。全るで骨肉の弟でも待つて居る様子である。

風葉先生、貴方だけは知つてるだらう。僕は唯一人の亡祖母の外、嘗て何人にも待たれ使られた事の無い人間です。親、兄弟、郷党、何人にも待たれぬ苦しき廓寥に忍びかねて、纒かにその鬱悶を酒にその他に遣つて居る人間です。先生一人に待たるゝを慰藉に、辛じて自暴自棄を免れて来た人間です。嗚呼、僕の世は寂しい。それを今、国木田独歩氏と云ふ他の一人を得たのだ。而かも独歩氏は僕年来の崇拜者、正直を云ふと、憎い口惜しい崇拜者である。

「第九信」は独歩が亡くなつた六月二十三日付で、独歩の遺骸を茅ヶ崎の別荘に運んだ後、遺骸の枕頭で書いたものである。「第十信」は七月五日付で付け足し的に書かれ、全てが国木田独歩『病牀録』に収められた。新潮社は四月に花袋・藤村・秋声らの編集になる『二十八人集』を独歩の病床に献ずる形で刊行し、花袋はその年の一月の『早稲田文

学』に載せた『一兵卒』を収めた。また、七月十五日付で『新潮』特別号を中村武羅夫の働きによつて出した。花袋は「自然の人独歩」を寄せた。佐藤義亮、中村武羅夫、小栗風葉、真山青果は所謂戸塚党の人達であつて、彼らの抛る『新潮』は博文館などに対する新興勢力であり、新潮社は実質的に独歩の死を契機に文壇ジャーナリズムの一线に躍り出たのである。それが花袋ら文壇の旧派には面白くなかつたようだ。南湖院の玄関で撮つた有名な写真、病気で小さくなつた独歩を真ん中にした写真の人物配置はその頃の文壇勢力角逐の一端を現している。一番大きな顔をしているのは小栗風葉で、独歩の真後ろに鬚面をさらすのが青果である。花袋はなぜか影が薄いように感じに見える。その写真の一番前に片膝立てて座る中村星湖は後に『彼等は踊る』という小説仕立ての回想文でその様子を語っている。

人々は入口の石段に三列に腰掛けて、一番上には、椅子に倚つた田淵氏（独歩、引用者）を囲むやうにして、二三の人や看護婦が立つた。遠慮してか、桂（中村武羅夫）はその中に入らなかつた。私（星湖）は一番下の地平の砂に腰をおろして、洋服の片膝を立てた。年齢その他から言つて、私が一番の後輩である事を考へて、なぜかしら私は非常に嬉しい心強い気持がした。（中略）

二た組の見舞客は、病院でまた別々になつて、私達はC―旅館（茅ヶ崎館）へ引返した。海岸の道は昨日ほど暑くなかつた。

『小山（前田木城、晃）つて奴はほんとに厭な奴だ！』と突然、森島（青果）は誰にともなく言つた。『どうしたんだい？』と松本（風葉）が訊いた。

『なにね、今日僕に逢ふと、いきなり、「君、作はよつほど進んだかね？」ツて、かうだ。僕が田淵氏の看護をかこつけにして、この海岸へ仕事を持つても来たやうな当てこすりを言やがる。あんな生意気の奴ツてありやしない。××社（博文館）にゐればこそ文士面をしてゐられるが、あそこから一と月でも離れてみる！ 生意気な！』

森島はやたらに憤慨した。そのわけは今日に始まつた事ではなかつた。阿部氏（花袋）が一二年前に文壇に覇を唱へた頃、新進ではあるが相当に世間から歓迎された森島は、血氣と自尊心にまかせて私交上などで阿部氏に盾を突くことが多かつた。阿部氏の最も忠実な門下であつた小山は常にそれを快しとしてゐなかつた。そして若い二

人は或会合の席上であらはに言ひ争つた事もあつたと伝はつてゐた。それに今度、田淵氏とは何の縁故もなかつた森島が俄に病院へ馳せ参じて、我は顔に『海岸より』を書いたりしてゐる事が、小山などには面白くなかつたものと、私は察した。

前田晃、木城は花袋の腹心的な編集者・作家であり博文館『文章世界』の編集を行った人であるから、新潮社や青果がでしゃばつてくるのを快く思わなかつたようだ。花袋は独歩が利用されるような気持がしてやはり不愉快だつたらしい。花袋は『東京の三十年』の中で回想して次のように語る。<sup>6)</sup>

此処で、その時のことを、中村星湖氏の書いた、『かれ等は踊る』の真相を解さうとするには、私は少しく深く入つて話さなければならぬ。その時分、小栗君の周囲に、所謂戸塚党なるものがあつた。思ふに、小栗君は、この新氣運動興の時代に際して、その勢力と位置とを墮さないために苦しんだであらう。従つて国木田君——垂死の国木田君を自分の勢力圏中に入れて置くことの必要を感じたであらう。真山君はそれを知つてか、又は知らずしてか、又はかれ自身も小栗君と同じやうな考へを抱いたか、かれ等は突然入つて来て、そして親友のグルウプをも脇にやるやうな形を取つた。これと言ふのも、『二十八人集』の編輯が、当時戸塚党に最も近かつた新潮社から発刊される運びになつたからであらう。私は後には真山君を国木田君に逢はせたことを悔いた。

青果の乱行はまだ先があつた。それは独歩の通夜でのことで、独歩の遺骸は茅ヶ崎で茶毘に附され、六月二十九日に青山斎場で葬式があつた。その前の晩にたぶん別会場を借りて通夜式を行ったのであらう。その時のことを先にも引いた水守が回想している。<sup>7)</sup>

赤坂田町での国木田独歩のお通夜の夜青果が花袋に向つてくたを捲き出し、満座のヒンシユクを買つたばかりか、海軍軍人の松岡静雄（柳田国男の弟で言語学者でもあつた）の鉄腕によつて表へつき出されてしまつた。その夜、かれはむざんな姿となつて新潮社の佐藤義亮の許にたどりつき悔恨と悲憤を訴へたと伝へられてゐる。その後、柳川春葉氏のお通夜でも大きくじりを演じたさうである。人には迷惑をかけなくとも酒の為に自身が失策を演じて、どれだけ損をしたものか計り知れないだらう。

素面しらふの時と酔つた時とではまるで一変してしまふ二重人格的の人間は相当あるもので、それを知らないでつきあつてゐると、とんでもない誤解に陥り易いものだ。

あゝいふ異常性格ともいへる芸術家の言動を一々杓子定規で計つてゐたら矛盾撞着だらけである。一と頃の青果の口癖は「武士道」であり、自分は「道学者」であり、人間は「損をしなくちやいかん」であり、自分の前では、「情事や女の話」は一切御免であり、なかく手きびしかつた。私などは「君はワイ談をしないからいい」と、ひどくおほめに預つたものだつた。

青果を巻き込んだ文壇内部の悶着は複雑というか、銘々が勝手な言い分を言い立てているきらいがあるので文壇無駄話ばなしである。平野謙が要約して述べているのが参考になる。

小栗風葉と真山青果との関係は、普通の師匠と弟子との関係をこえて、もつと歪んだ特異なものだといえないこともないのである。(中略) ところでもう一度小栗風葉、佐藤橘香、佐藤紅緑、徳田秋声、柳川春葉という氏名を熟視すれば、彼らが田山花袋の先頭とする自然主義文学のオーソドックスから多少ともはずれていることは一目瞭然だろう。果して田山花袋のいうように、戸塚党とか戸塚派とかいうひとつのグループを形成していたかどうかは二の次として、すくなくとも彼らが佐藤義亮の『新潮』にいちばん親しい文士たちだったことは、どうやら動かぬところである。(中略) 新潮社という出版社はもともと地方在住の向学の念にもえる文学ずきの青年を読者対象とするような社の性格をそなえていたのである。(以下略す、中村武羅夫、加藤武雄、生田春月、榎崎勤、佐左木俊郎ら、また和田芳恵など、そして風葉、紅緑、秋声ついで青果らがこの新潮社の系列である)。(中略) 病床にある国木田独歩に献げるといふ名目のもとに、(中略) 『二十八人集』を明治四十一年四月に編纂出版したのも、いちやく真山青果編『独歩病床録』の刊行を約束したのも、そういう新潮社の苦衷のあらわれだった、と解されぬでもない。しかし、博文館という一流出版社社員の田山花袋としては、そういう新潮社の内幕がみすかせるだけにかえつていつそう苦々しく、『病床録』などの刊行も場当りのキワモノ出版とみなしていたかもしれない。このことがますます真山青果に対する感情をこじらせた一因となつたことはほぼ確実だろう。



## 2

『南小泉村』は明治四十二年十月に今古堂書店から刊行されたもので、『南小泉村』の連作の他に『寺の杉』（『新潮』明治41・5）と『鷄一羽』（『江湖』同年4月）とが「附録」として収録されている。両作とも仙台近辺を材料にした郷土ものである。『南小泉村』は「第一・第二」が『新潮』（明治40・5）に発表され、以下随時『中央公論』『早稲田文学』『文章世界』に載つたもので、言うならば南小泉村オムニバスといった体裁の小説である。前述したように青果は明治三十三年、二十三歳の頃、代診などをして南小泉村周辺を巡り歩いた。その体験がこの小説となつたわけだが、単行本の序には、「ふるき時、放浪してこの南小泉村に居た。かれこれ一年近く。その頃は別に小説に書く気もなく、ただあるがまゝに見て暮した。今から考へると、最少し親切に見て置けば好かつたとも思ふし、又、書く気などは無く見て居たから好かつたやうにも思ふ。兎に角、この作は自分にとりて最も思出の多い小説となつた。」云々と書いてるので、大体一年程度、南小泉村の辺りを観察したのであろう。五、六年の後その記憶を掘り返して小説にした。それが自然主義文学隆盛の明治四十年に発表されたのも偶然とはいへ運命的であつた。青果は一時徳富蘆花に傾倒し入門を乞うたが断られたという。もしも蘆花門下生として考えれば、『南小泉村』は蘆花の『寄生木』に類似した小説と見られてもおかしくない、東北の農村風景の活写なのである。では『南小泉村』とは何であるのか、青果の筆致を中心に検討したい。

『南小泉村』の「第一」は次のように始まる。

百姓ほどみじめなものはない、取分け奥州おうちゅうの小百姓はそれが酷いひど、襦袢はちまきを着て糶飯かてめしを食つて、子供ばかり産んで居る。丁度、その壁土のやうに泥黒い、汚きたない、光ない生涯を送つて居る。地を這ふ爬虫はひしの一生、塵埃ちりほこを嘗なめて生きて居るのにも譬ふれば譬へられる。からだは立つて歩いて、心は多く地を這つて居る。親切に思遣ると気の毒にもなるが、趣味に同情は無い。僕はその湿気臭いしめりくさ、鈍い、そしてみぢめな生活を見るたびに、毎いづも、醜いものを



憎むと云ふ、ある不快と嫌悪とを心に覚える。實際、かれらの中には、『生まれざりしならば』却つて幸福であつたらうと思はれるのがある。いや、僕の目だけには、その方が多いやうに見た。

このように始まつて、さらに続けて南小泉近辺の百姓を劣等醜悪で人間以下の動物か虫かのごとくに賤しめている。全く救いがなく、同情もしないやうに書かれる。どうしてこのやうに賤しめることが出来るかと逆に作者青果の精神状態こそが疑われるやうである。その理由として恐らく青果は特異な高尚高貴を求めて已まない、自分でも認めている突飛なクリスチャン精神の持ち主だつたからではないか。だから仙台近郊農民の姿を極めて人間並みでない醜悪劣等なものとして描いた。人間のあるべき崇高さに比して余りに悲惨ではないだろうかという青果的愛情と率直の発露がこの描写やこの小説にそのまま顕現したとも考えられる。そのような青果の偏執的誠実は仙台方言の多用として顕現している。方言の用例を見てみよう。

渠等の根性の卑吝は云ふ迄も無いこと、改めてこゝに云はぬにしても、渠等がいかにも訴訟上手な事も、僕には厭悪の一つとなる。一生を自然の前に跪つくの外にかれらには仍ほ跪づくべき地主がある。詰り、二人の主人に仕へるのだ。梶目を盗むとか、年貢の換納とかは常住としても、毎年ひけかたねひの滅方願ほど地主に取つて尽甲斐の無いものは無い。やれ雨だ、風だ、浮塵子だと、来る年も来る年も作柄に云分を付けて、幾らかの分滅ぶびけに有付かうとする掛引の際どさは、中々商人などの真似及ぶ所では無い。

ここで言う「尽甲斐の無い」は『仙台方言辞典』によれば、「うるさい。わずらわしい。ズンケネーに近く発音。」という意味である。青果は方言使用を控えるという妥協やサービスよりは自分流を貫く方を採つたのであろう。

真山青果の『仙台方言考』（宮城県人）に四回に分けて発表。大正14・7の「じんけなひ」を見ると「仙台にて、物事の反復して其煩勞に耐へぬことを「じんけなし」と云ふ。信長公記「近年武田四郎新儀の課役等申付、新関を居、民百姓の悩ミ、無二尽期一重罪をば賄を取。」京都往来「自他の繁昌、事旧り候雖、尽期有る可らず候。」とある。『南小泉村』の「第二」には「今の医者様は商人のやうだ。あれも金、これも金、本当に尽甲斐の無い事ツだ。」がある。「第三」には「又だ、尽甲斐の無い事ツた。」五兵衛は手紙を読んで、さて、勿体らしく眉を顰めた。／「何か急な御用

「なんですか。」僕は飽迄先方の意を嚮へて、故と大業に尋ねるのだ。／「何有、学校の改築事件で又委員に引張出されたんですが、斯う何も彼もやらせられては、全く尽甲斐がありません。全体村長が無能な人ですからな。」とある。

「第二」に出るのは「いぐね」という屋敷林である。黒瀬ろくの往診に行く場面は、五月か六月の頃で、昼過ぎからは雲行きが怪しくなつて冷たくなり暗くなった。「土橋を渡る時、路を横切つて、真白な家鴨が二三羽、トツ／＼と鳥屋の方に急いで行く、寂しい田舎道は両方から生ひ冠る繞林の下を灰色に長く続いて見える。梢には風がざわつき初めた。」という件の「繞林」は仙台地方ではよく使う言葉のようだが方言だろう。『辞典』には「いぐ。クにつけた〇は鼻濁音」ネ「居久根」あるいは「家久根」の意か。隣家との境や屋敷の周圍に植えならべた樹木。防火、防風砂用も兼ねる。」とある。青果の『方言考』では「屋敷の周圍に植ゑたる樹木。茨城地方にて垣根を「くね」といふ。家の垣の意なるか。」とある。

次に「第二」に「譜の切れる」という方言がある。

老爺は顔にかゝる雨を平手で払ひながら、

「まあお出なさい、そこらまで一所に行きますから。——実は内の婆さんの病氣ですが、貴方様のお見立は何ぜうでがすべな。」

「まあ難しいやうだな。尤も水でも取つて見たら、何う変わるかも知れないが。」(中略)

「実は先刻から……あすこでお待申して居たんですが。」と、百姓には譜の切れる、もの馴れた口振である。

青果の『方言考』に「ふがぎれぬ」は、「こゝろ迷うて決断せぬを、ふがぎれぬといふ。柳樽三十五篇「あれかこれかと箸のふがぎれず。」同二十三篇「ふのきれた傘やつとかしてくれ。」同四十九篇「べつかうのふより買人のふがぎれず。」とあるので、右の引用で「百姓には譜の切れる」とは心が迷うことから百姓のわりには思慮ある様子を言うようだ。

次に「どら無い」という方言が「第三」にある。

河原町へ買物に出たとかで、女房は居なかつた。

「さ、とゞら無いけど。」と五兵衛は花莫座を僕に敷いてくれて、自分は火鉢の前に無遠慮な胡坐を掻いた。『方言辞典』によれば、「トドロクない」は「乱雑な。取り散らしたさま。トドロクナーに近く発音。」と言う。青果のは載っていない。

同じ章に「だんぼ」という言葉が出ている。五兵衛の女房が帰って来、私を女房に紹介すると、「これ、この人は今度石岡だんぼの家さ御座つた先生様だ。」とある。

『辞典』に「ダンボ」は「↑檀方・旦那」「武士」より転じて、旦那・役人・主人・地方有力者・旧士族などの称もと「檀家・檀徒」の意の古語。近世以後は、主に自分と同等またはそれ以上の男性に対する敬称。」云々と出ている。

「第六 手斧」には「ねつい」という言葉が出て来る。

「嫉妬さね、嫉妬より外に何があるもんで。あんなにねつつく犬見たいに追駆け廻して居た御亭（亭主のこと）だもの、何んの憎くて殺るす気になぞなりすべ。屹度嫉妬から気がカツとして了つたんでがすぞ。」と痢の強い奥さんは、最う唇をピリ／＼顫はして居る。

『辞典』で「ネつい」は「熱い?」くどい。しつこい。執拗。ネツエに近く発音。古語。「云々とある。

『方言考』には、「ねつい」は「しつこい。くどい。執拗。」とあり、柳樽から「ねついごせ内ぶところ」にばち袋。」が引いてある。

次に同じ章に「餅に遇へ、酒に遇へ」という箇所があり、方言ではないが、地域独特のお呪いであるので挙げておく。葉籠、外科道具、（ほうたい） 綯帯用具の準備までして出掛けやうとすると、奥さんは新しい足駄の齒に、（なべずみ） 鍋墨を塗って、「餅に遇へ、酒に遇へ。」と三度頂く真似してそれを土間に揃へてくれた。

青果『方言考』によると「餅に遇へ酒に遇へ」とは「新しき履物をおろす時の呪文。下駄足駄のうらに竈の煤をつけて擦り合せつゝ、「餅に遇へ酒に遇へ」と三度唱ふれば、好きことありとて、われ等十歳くらゐまで祖母のしかするを記憶せり。」とあって、新しい下駄に墨などをなすりつけて、好いことがあるように呪いをするものである。次にかたつむりを「たまくら」という方言がある。

「今年ぐらゐ蝸牛なまぐるの生なく年はガアせんな、文左衛門とこでなぎア、手桶で前の川へ投げたつて事ことです。——では、まアお休みなさい。」と隠居に挨拶して、ズルリ〜と靴には滑る青苔の庭を、足許に気を付けながら先に立つた。『辞典』では「タマガラ」は「↑手枕？」かたつむり。蝸牛。タンマガラとも言ふ。語源は、蛇の手枕とする説が有力。」である。『方言考』は「たんまくらとも云ふ。蝸牛。「蛇の手枕」の略。」とある。

『第七 お灸屋の兄弟』には「よごみ」という方言がある。

冬三は好くこの石岡（僕の居る家）へも白水よしみを集めるに來る。小男の親父おやじに酷肖そっくり似て、矢張り唇やっぱの厚い、鈍さうな顔付の若者である。

『辞典』では「ヨゴみ」「↑汚れ茶？」は「(ヨゴレゴミの約か) 台所の屑。食料の切り屑や残物の屑。仙台的独特のことばで、江戸時代には一般にヨモギ(蓬)の訛にいう。」とある。

『方言考』で「食物の食ひちらし、食ひあまして捨てるものを「よごみ」といふ。台所のながし場にはよごみ桶・よごみ箆へらなどいふものありて、それ等の廃残物を投入るゝなり。「そのよごみを豚にやれ」、「野良犬がよごみを探すやうに」などいふ。但し、必ず食物にかぎることにて、他の廃物には云はず。又いかに食ひ余しても、まだ人間の口にし得る間はよごみと云はず、これを捨てる時はじめてよごみといふ。(菱沼君回答) という。

次に「がながく」という方言がある。

「冬三あんこ、何んとしたぞ。何時いつ会つても影薄いなア、好いい若い者が何時〜まで豚のがながくでもあるまい。些ちつとシツカリしろちえや。」

『辞典』によればガンカク「↑看護」は「病氣などの世話をやくこと。江戸語。㊦かんがく(正字未詳)看病。看護。面倒を見ること。多く病人にいうが、それに限らぬ。」とあつて、以下に『柳多留』などからの用例がある。

『方言考』に「がながく」は以下の説明がある。

真葛むかしばなし「とら次郎幼年よりおもきおんをうけし人故はなれかね、其いん居につきてがながくし、二十五六まで居たりしが、隠居死後云々。」又同書「新山けん歳といふ書物よみなりしが万作兄の病氣の時にもこの者

かんかくせしといふ」とある。「がながく」は仙台方言にて、介抱する、世話するの義にて、病人看護なども「がながくする」といふ。又、「今日は布団のがながくした」、「はる着物のがながくをした」など云ふは、補綴を加へ手入の世話をすることなり。

次に「とろべつ」という副詞がある。

この頃では病人も老爺も余程僕を迷惑がつて居る風である。

「先生様この頃はとろべつ悪寒はするし、それに息が苦しくて臥ても居られせん。何んとかなんねえものでがすかね。」と病人は染々訴へて居た。滲出液が化膿し初めたのかも知れぬ。

『辞典』には「トロツペツ」「とろつ拍子」始終。いつも。ひっきりなしに。トロベシ・トロべつに近くも発音。藤原相之助「古い方言と特殊語」（昭和七年二月『仙台郷土研究』二ノ二所収）に、「トロツペツ 度々、再々、始終などの意。雅樂の中にトロツ拍子といつて絶えず奏してゐる樂があるとかいふ。それから出た言葉ではなからうか。」とあり、真山青果の『仙台方言考』にも記され、現に江戸語および関東・東北の殆どの県に同系の方言が使用されているので、やはり「トロツピョーシ（とろつ拍子）」という樂語が語源らしい。」云々とある。

『方言考』では「とろべち」は「同じ事の间断なくつゞきて煩雜を覚ゆるを、仙台にてとろべちともとろべしとも云ふ。「とろべち風を引いてゐる」、「あの人はとろべち金を借りに来て煩し」などの如し。徳川時代江戸にも行はれたる語にて、雅樂のとろ拍子より出たり。東儀鉄笛君の説明に、雅樂にてとろ、又はとろくと云ふは、一定の間を置きて太鼓をトン——トン——と间断なくつゞきて、緩急なく極めて倦怠を覚ゆるものなりと云ふ。」と説明されている。

ついでに『癩腫』（『新潮』明治41・1く2）からも一例を引く。「まてい」は今も土地によつては使われているようだ。

曾祖母は祖母をおごくと呼んで居た。嫁に來た頃からの名である。母の兄、僕には伯父の謙吉は長く他所を歩いて居た留守を、二人の年寄が真体（まてい）に守つて、女手だけで家を張つて來たので、年寄どもは嫁姑と云ふよりも姉妹のやうに夫婦のやうに相互に便つて居たのだ。

『辞典』では「マデ(一)」「↑全(また)い」①念入り・ていねいなさま。②儉約で、つましいさま。語源については「真体」「全(また)い」「真手(まで)」等から来たとする説が有力。」とある。青果は次のように解説している。

まてい……物事に着実にして浮華ならぬ人を、仙台にて「まていな人」と云ふ。また儉約なる人の意味にも使用する。物類称呼にも、中国にて律儀なる人をまてな人と云ふよし見えたり。思ふに真体なる人なるべし。小谷口碑集には「まてえ。節儉、実直、注意、周到」とありて仙台と全く同じ。杜陵方言考に「まて。物を丁寧にするを、まてにするといひ、又、吝なるをまてな人といふ。もとは真手なり。古言、まてにうけ、まてにさゝぐ杯言は、皆左右の手にて受もし、捧げもする事也。万葉集に左右手、両手、皆迄といふに借りてよませり。さて大切のことは、両手にて扱ふ故、大事にするをまてにするといひ、又こまやかにするに転りて、吝なる人もまてといふに至れり。

以上見て来たように、青果は仙台や宮城の人にしか分らないような方言を創作のなかに盛り込んでゐる。これは不器用のためなのか、剛直傲慢な性質或は青果流の自然主義なのか。

猪野謙二は次のように述べる。<sup>10)</sup>

まずその文章についてみると、たとえば「老爺は丸い背中を日に曝しながら、周囲に結つた裏竹の垣根を真体(まてい)にほぐして居る」(『家鴨飼』)とか、「茶の間がまんどろに明るい」(『男柱』)とか、「見臭い、胴長ではない、脛のかゝりも伸びて居て」(『男五人』)とか、郷里の仙台方言を東京や千葉などの自然、人間を描いた地の文にまで平気で交えてゐる。(中略) かれの文章の生氣と新鮮さが、かえつて、こうした方言の意外に適切な使用などによるところが多いのは、こんにちあらためて顧みられてよいだろう。たとえば正宗白鳥におけるチェホフに対応して、かれについてはゴリキイの影響がいわれ、事実その作品にもしばしばゴリキイから得たアイデアを仄めかしたりもしているが、烈しく粗野なその主観的世界の形成には、むしろより多く東北人特有の暗鬱な情熱のありかたが、あざかつている。それぞれ多少とも地方色を特徴としてもつ自然主義作家の中でも、かれほど濃厚にその郷土性を、いわば発想の根源にまでまといつかせていたものはあるまい。

そして青果自らが無名時代にその「百姓言葉」を改めるように石橋思案に諭されたことを引いている。それは『文芸倶楽部』に投書した際、「此の作者には多少の才気ありと認む。泉斜汀氏に私淑せる風あるを見る。今少しく修養して、東京のことに通じなければ可けぬ」と、仙台弁の抜けないことを指摘されたというものである（前掲、「奈何にして文壇の人になりし乎」）。しかし青果は傲岸偏執の性格なのか若しくは不器用に過ぎたのか、東京風に性質を矯正することが出来なかつたようである。猪野は次のようにまとめる。

要するにこの作品（『南小泉村』引用者）は、ことにそのはじめの部分は、若き日の屈辱的な放浪生活の体験によつてきわめて直接的に支えられ、しかもその古風な偏見やら、旧思想やら非都会人的な粗放さやらの一般的な意味での欠陥をほとんど満開のままにさらけ出していることで、かえつて独自の成功を収めたものといえることができる。（中略）

結局、豊かな天分をもちながら、明治四十年代当時の文壇の近代主義的風潮が身にあわず、自然主義的な平面描写とそれにとどまり得ぬ異色の主観的世界との間に低迷しつつ、実生活の上でも芸術の上でも充分に渾熟したものを形作りえずに退場していったのが、小説家としての青果であつたともいえる。（中略）要するにせまい自然主義文学の「型」にはまり得ず、その文壇的常識が「体質」にあわなかつた彼の真価とその文学史上の存在理由とは、明治末年の自然主義文学あるいはひろく日本の文壇文学全体からこの悲劇的な脱落を、かえつて大きな光榮であつたと断言し得るこんにちの新たな批評の立場においてのみ、はじめて正しく見定められるであらう。

吉田精一は『南小泉村』について次のように論じている。<sup>11</sup>

この小説（第五短編集「南小泉村」引用者注）のあと味は暗い。百姓の男女は痴鈍で貪欲で、淫らで、人情が薄く、何のために生きてゐるかわからない。世話役や一寸した旦那衆は尊大でずるく、機嫌買ひでいやしい。夫婦であつても金のことになると別々であり、共に我利々々亡者である。親子はと見れば「寺の杉」のやうに子は親を親とせず、同じ女を奪ひ合ふ。比較的上層の農民でも、「鶏一羽」が身上にひびくといつて病身の親に食はせない吝嗇ぶりである。（中略）



この陰鬱で、明るい光のどこにも見られぬ、救ひのない生活を、作者はどうにもならぬ現実として描いて見せた。このやうな醜悪、不幸、卑吝が何処から来たか、何に由来するかは説かない。ましてそれを如何に打開するかは問題にしない。同じ農民小説でも長塚節の「土」は酷烈な農村生活を描くが、一方によるこびをも見てある。あそこに見えるほどの明るさも、理想の影も、ここにはないのである。彼はただみにくい人間の姿を諦視する。酷薄な現実には、太い線でぐいぐいと描いて行く作者の腕によつて精確に、具体的に把握されてゐる。しかし何故このやうに救ひのない人生を、かくまでも強烈な絵として人に示す理由があるのだらう、といふ疑ひは残るのである。

吉田はこのように論じているが、最低の生存として描出したところに青果の芸術性があったとも言えよう。花袋が下層庶民の生存状態を生々しく書いた諸編と比べても、青果には独自の信念があったことが窺える。吉田の見解に近いのが田辺明雄で、「こつち調子で、『南小泉村』の冒頭が非常に悲惨で救いがないこと、引用者」書かれている。社会主義的、乃至人道主義的な眼で農民を見ているところは微塵もない。むごい、あるいは無反省だと言える。この人が後にマルキストとなるのだ。たぶん後年の青果はこの一文を恥じたであらう。が、社会主義洗礼以前の青果の生地は、ここにもつとも正直に語られているのだ。<sup>12)</sup>と述べているが、青果のキリスト教とマルクス主義と『南小泉村』の方言多用と下層農民に対する冷酷苛烈な筆致は底では一つに繋がっているのではなからうか。つまり青果の文学の底にあるのはあるべき人間の姿を指定した理想主義で、そのために微温的な態度を峻拒したのではなからうか。吉田は次のように結論するが以上のように考えれば青果の文学の本質も理解できるだろう。

青果の雄勁な文章は独特のものであり、自然主義の諸大家と比して天分がさして貧しくはなかつた。ただ當時の自然主義の趨勢の中に置いて見ると、観察のきめがあまり、一面的で、態度の上にも一種の硬<sup>こば</sup>ばりがとれず、常に衝動的で、一時的な感興による作風が、彼を大成させない一原因であつた。彼は風葉から、「根」と「努力」の重さを説かれたにもかかわらず、情熱的な感興によつて左右されるもちまへから脱し切れなかつた。それともう一つ彼自身の内部に、前近代的なもの、例へば感傷的な英雄主義のやうな、虚勢と形式主義の尊重があつた。それが真に自己を正しくありのままに凝視することを許さず、最後まで他人の見る眼を気にした。自己反省や自虐がない



ではなく、時にはわざと自虐にすぎることがあつても、どこかで自己弁護を忘れまいとする。徹底した自己批判がない。彼が彼自身らしい人間を主人公とした私小説的作品に於て殆どすべて失敗してゐるのは、この自分に対する甘えのためであつて、自己をとことんまでつきつめ、真に客観視する能力をもたなかつたことを証明する。いはゆる小主観による誇張と歪曲とから、彼の全作品を通じて脱却することが困難だつたのである。だからきはめて野性的な特殊の題材や人間を扱ふときには、そのやうな欠陥はめだたず、却つて対象を強烈化して、成功の域に迫つたのである。しかし大体に於て、彼の主観的傾向は、雑多な個性の中に入つて人間を描きわけ、人生そのものの姿を客観的に具体的に描くことを不可能にしたのである。

文学作品をどのように捉えるか、どうあるべきかは即断できないが、小我に執るとき確かに文学は狹隘狭量に陥るきらいがあろう。青果の場合は、全集を見ても分かるとおり膨大な戯曲が西鶴や考証的研究とともに残されたわけで、それら全体をどう見るかが今後の課題であらう。

注

- (1) 正宗白鳥「真山青果論」(『新潮』明治44・2) 参照。
- (2) 正宗白鳥「自然主義盛衰史」八(『風雪』昭和23年3〜12月、引用は『正宗白鳥全集』第二十一卷、福武書店、昭和60年) 参照。
- (3) 岡保生『評伝小栗風葉』(桜楓社、昭和46・6) には、「明治三十九年に青果が風葉の代作をしたと思われる作品は、「老青年」(『早稲田文学』3月)、「父思ひ」(『女学世界』7月)、「心の影」(『手紙雑誌』10月)、「血統」(『新潮』11月)である。」とある。
- (4) 水守亀之助「真山青果☆風雲児の正体を語る」(『わが文壇紀行』昭和28・11 朝日新聞社)
- (5) 中村星湖「彼等は踊る」(『太陽』秋季大附録、大正5・8)
- (6) 田山花袋『東京の三十年』(博文館、大正6・6)
- (7) (4) に同じ。
- (8) 平野謙「解題」(明治文学全集『真山青果 近松秋江集』筑摩書房、昭和48・6) 参照。

- (9) 浅野建二『仙台方言辞典』（東京堂、昭和60）参照。
- (10) 猪野謙二「自然主義作家としての真山青果」『文学』昭和35・6、明治文学全集70から引用
- (11) 吉田精一『自然主義の研究』下（東京堂、昭和33）
- (12) 田辺明雄『真山青果——大いなる魂』（沖積社、平成11）
- 付記 本論考は平成23年8月5日、仙台市に於いて行われた日本近代文学会北海道東北地区合同研究集会での口頭発表を改稿したものである。